

## 28 側脳室内脈絡叢へ孤立性癌転移をきたした2例

福井 崇人・伊東 民雄・岡 亨治  
尾崎 義丸・中村 博彦

中村記念病院脳神経外科

転移性脳腫瘍のうちで側脳室内脈絡叢への転移は稀で2000年の日本脳腫瘍統計では1.1%とされているが、そのなかでも孤立性転移は極めて稀である。過去の文献上の報告では17例のみであるが、原発巣としてはslowly progressive typeの腎細胞癌が8例と最多を占めている。今回我々は腎細胞癌、直腸癌から脈絡叢へ孤立性転移をきたした2例を経験したので文献的考察を加え報告する。

〔症例1〕52才、男性。腎細胞癌(renal cell carcinoma)の左側脳室下角への孤立性転移例である。Inferior temporal gyrusよりtranscortical approachにて全摘出した。

〔症例2〕53才、女性で、直腸癌(moderately differentiated adenocarcinoma)の左側脳室三角部への孤立性転移例である。ガンマナイフ施行後再増大をきたしたため、interhemispheric pre-cuneus approachにてspleniumに浸潤した部分を一部残し亜全摘出した。γの局所照射を追加した。本症例の治療において頭蓋底アプローチによる可及的摘出と放射線治療の併用が有用であった。

## 29 脂肪性髄膜腫へ転移した腎細胞癌の一例

君和田友美・隈部 俊宏\*・渡辺 みか\*\*  
富永 悌二・白根 礼造\*・吉本 高志\*

広南病院脳神経外科  
東北大学脳神経外科\*  
同 病理部\*\*

今回我々は、脂肪性髄膜腫へ転移した腎細胞癌(淡明細胞癌)の稀な一例を経験したので、主に画像所見、病理所見について、文献的考察を加えて報告する。

症例は70歳女性で左片麻痺にて発症した。MRIにて右前頭葉内側にT1強調画像で腫瘍辺縁は低信号、内部は高信号、T2強調画像で辺縁は

やや高信号、内部は高信号を示し、辺縁が著明に造影される長径6cmの腫瘍を認めた。腹部CTにて左腎に長径8cmの腫瘍を認め、腎細胞癌からの転移性脳腫瘍の術前診断にて摘出術を施行した。術中所見では、腫瘍は大脳鎌から発生したものと考えられた。病理所見で、腫瘍内部は腎細胞癌(淡明細胞癌)として合致する所見であったが、その周囲を取り囲むように脂肪を含有する脂肪性髄膜腫が確認された。以上より、脂肪性髄膜腫内に腎細胞癌が転移したものと考えた。

髄膜腫内への転移の報告は、そのほとんどが髄膜皮型髄膜腫であり、脂肪性髄膜腫への報告は一例もない。原発巣は、肺癌、乳癌が多く、腎細胞癌の髄膜腫への転移は、我々の報告で5例目であった。

## 30 腎癌脳転移の三症例

鈴木 直也・鶴谷 尚信\*・松倉 朋子\*  
清水 俊夫\*・鎌田 満\*\*

青森労災病院脳神経外科

弘前大学脳神経外科\*

青森労災病院病理検査科\*\*

【目的】腎癌全摘術後の症例のなかには潜伏期間のち脳転移巣による症状を呈し脳神経外科に治療を求められることが稀にある。脳転移の症例はすでに肺などの他臓器の無症候性転移巣が存在していることも容易に推定される。一般的に腎癌の放射線感受性は高くなく、化学療法はインターフェロン以外に有効な選択肢はない。しかし一部のインターフェロンが有効な症例は腫瘍の縮小と生命予後の延長を期待され治療を求められる症例も存在する。最近経験した腎癌脳転移例の3例を報告し治療選択肢について検討した。

〔症例1〕52歳男性。約半年前に腎癌切除術後にインターフェロン療法を受け肺転移巣は消失。前医でてんかん発作を生じ脳転移巣が判明し放射線治療(γナイフ)を受け腫瘍増大は抑制された。脳浮腫の悪化により紹介入院。

〔症例2〕59歳男性。10ヶ月前に腎癌摘出術を受けた。脳転移巣と脳浮腫により急性の右片麻痺